教育美術
佐武賞

生活の中の芸術と関わり、表現活動を通して楽しく豊かな生活を創造する題材の開発と手立ての工夫

概要

子供たちが自然の中で豊かな体験をしたり、芸術に触れ合って感性を高めたりする機会が減っていることが以前から指摘されている。これは今回実践を行った3年生の子供たちにおいても当てはまることであり、生活の中にある自然や環境と関わり、体の感覚や体験を基にして表現することの経験が乏しい。このような課題から、感性や五感を通して自分の身の周りのものに働きかけて価値を引き出すことや感動や感情を基にした表現活動を行う必要があると考えた。新学習指導要領の芸術教科の目標においても「自分と生活」との関わりについて示された。子供たちの生活を考えると教科の領域に捉われることなく感覚を融合して活動を行っているために、本研究では「冬」をテーマに各教科を関連づけた表現活動を扱う題材を開発・実践し、教科横断的な教育を行った。題材のはじめに共通する体験として教室の外に出て冬の世界を体全体で感じる活動を行い、視覚、聴覚、触覚など体の諸感覚を使って感じたイメージや思いを冬の記録としてオノマトペで表した。その後、絵・音楽・体の動きと様々な表現活動を行った。冬という共通テーマを基に各教科における表現活動を相互に関連づけたことは、子供たちの心や体の感覚を開かせて表現方法を拡張することや想像力を育むことにつながった。冬の音探しを礎に本題材の活動をスタートさせたことが、表現に対する思いや考え・イメージを深め、その根底に働く感性を育成することができたと成果を感じた。絵を媒体にした音楽作りや身体表現では即興的に自由に表す楽しさを子供たちが感じていた。創作への抵抗感を軽減し、表現意欲を高めるのに絵は効果的に働いた。

今後の課題として、図画工作科との関連付けを検討することを通して各教科で育てたい資質・能力を明確にして題材を構成するカリキュラム・マネジメントを充実したい。

古家（ふるいえ） 美和（みわ）

勤務先：兵庫県 たつの市立御津小学校 教諭
出身校：島根大学 教育学部 学校教育教員養成課程
美術教育専攻

1　テーマ設定の理由

現代の子供を取り巻く地域や家庭の環境が急激に変化する中、子供たちが自然の中で豊かな体験をしたり、芸術に触れ合って感性を高めたりする機会が減ってきていることが指摘されている。今回実践研究を行った3年生24名の子供たちも大半が図画工作科の授業が好きと感じているが、自分の生活の中にある自然や環境と関わり、体の感覚や体験を基にして表現することの経験が乏しい。また、筆者がこれまでに実践してきた題材や授業を振り返ってみても子供たちが日常的に接する芸術と切り離されていたことが課題である。このような課題から、感性や五感を通して自分の身の周りのものに働きかけて価値を引き出すことや感動や感情を基にした表現活動を行う必要があると考え題材の開発を試みた。新学習指導要領では、芸術教科の目標の中で「自分の生活」との関わりについて明示された。[1] 子供たちの生活文化を考えると美術・音楽といった領域の活動にとどまることなく融合して一体的に活動が行われている。そのため、感覚や行為を一体的に取り扱う内容の教育が有効と考え、本研究では「冬」をテーマにして関わりのある近接した教科の学習活動を取り入れて構成する教科横断的な3年生の題材を開発した。年間を通して、季節ならではの体験活動と表現活動を関連づけるカリキュラムデザインを行っている。

例えば、夏にはレンコン掘り体験を基にして想像画を描いたり、地域の夏野菜を紹介する紙芝居をつくったりした。3学期は、冬の美しい世界と関わる中で形成されたイメージや行為とつなぎ合わせて他教科の表現活動に活用することで、知のネットワークを一連の連動したものとして構造化・身体化できるのではないかと考え、テーマを設定した。子供の想像力や美術教育が重視している創造性を音楽科や体育科などの他教科の表現活動においても生かし、ねらいとする資質や能力を総合的に育むことを本研究において検証したい。なお、本論文においては特に図画工作科の授業を中心に実践をまとめ、その成果と課題について報告する。

2　研究内容

（1）本題材で育成したい資質・能力

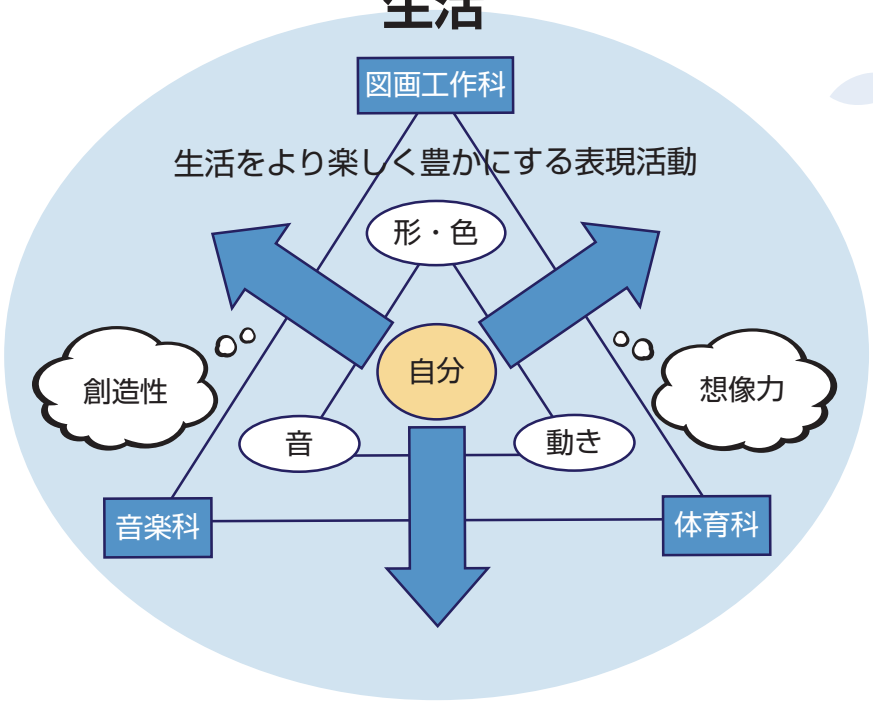
本題材「冬を表して楽しもう」を通して、子供たちに育成したい資質・能力は「感性を働かせて周りのものや環境と主体的に関わり、感じたことを造形、音、言葉、身体など様々な表し方で自分なりに表すことで生活をより楽しく豊かに創造しようとする」資質・能力である。中学年の子供は、想像力を働かせることを楽しんだり、友達との活動の中で発想やアイデアを共有し合って表し方を工夫したりする姿が見られるようになる。そのため、想像力を働かせる表現活動で教科をつなぎ、自分の感じた冬を友達と関わり合いながら様々な方法で表すことは、創造性を育み、冬の世界を豊かに捉える概念的知識を形成することにつながるのではないかと考えた。各教科の内容知を生きて働く自分事の知識として活用する子供の姿を目ざすために新しい学力観に基づく評価規準を設定した。自分が見つけた冬を自分の良さや可能性を発揮しながら主体的・創造的に表現活動として展開していくためには根底に働く感動や感情の育成が不可欠と考える。

そのため、共通する体験としてはじめに教室の外に出て冬の世界を体全体で感じる活動を行う。視覚、聴覚、触覚など体の諸感覚を使って感じたイメージや思いを冬の記録としてオノマトペで表す。次に、図画工作科の授業において自分たちでつくったオノマトペを形や色で表す活動を行う。そのようにして製作した「冬の絵」を基にして楽器を使った音楽づくり（音楽科）、表現運動（体育科）とさらなる表現活動につなげていきたい。子供たちの想像力や創造性に着目し、様々な方法で表現活動を行い、創造することで自分にとっての意味や価値をつくりだすという図画工作科が大切にしている学びを総合的に深めたい（図1・次ページ）。

（2）本題材（図画工作科）における手立て

（ア）身近な自然物や環境に体全体で働きかける場の設定

本題材のはじめに、教室の外に出て冬ならではの自然物や環境と関わって冬の音を探す活動を行う。実際に聴こえた音以外にも、何かの動きや様子を表す音も探すように促す。その際は、自分がものや環境に主体的に関わることで耳では聴こえない音を自分でつくり



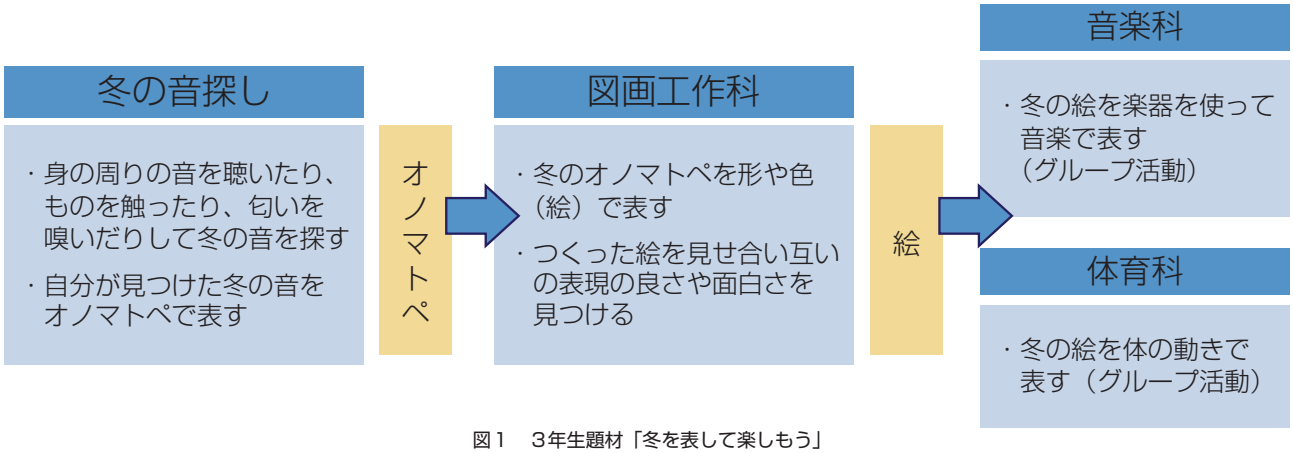


図１　３年生題材「冬を表して楽しもう」

だすことができる喜びを味わわせたい。例えば、氷を触ったり、冬の植物の匂いを嗅いだり、寒さを和らげるために友達と体をこすり合わせたりするなどの行為が考えられる。視覚、聴覚、触覚など体全体の感覚を十分に働かせて生活の中の形や色、音と関わり、日常から豊かさを発見することができるようにする。

(ｲ)自分が見つけた冬の音をオノマトペで表す活動

オノマトペは、人間の感覚と深く関わり、一人一人の多様な感じ方を自由に言葉で創造できる利点がある。オノマトペの語源が「名前の創造」であることや、「言語の形成過程が視覚や聴覚や体性感覚などを通した感覚的・感性的経験が基盤となっている」[2]特徴を考え、題材に取り入れた。そこで、自分が見つけた冬の音を即興的にオノマトペで表すことで自分なりの冬のイメージを広げることができるようにする。そして、学級の仲間と共に自分の感覚やイメージをオノマトペで言い表す中で思いを共有し、言葉や音の響きを介してコミュニケーションをとる時間を大切にする。

(ｳ)自分の表したいことを試すことができる環境づくり

絵に表す際に試行錯誤しながら表現を試す時間を十分に確保し、その様子やつぶやきに心を傾ける。製作の際、自由にオノマトペを声に出しても良いことを伝え、音の響きと形や色が共鳴するような雰囲気づくりに努め

る。また、自分のイメージに合った筆致や色づかいができるように、色の異なった様々な大きさの紙や材料や用具（刷毛、金属製こて、割り箸、ローラー、トレー等）を準備しておき適時使えるようにしておく。また、紙を自由に破いたり、切ったり、折ったりするなど形を自由に変化させて良いことも伝え、工夫して表すことができるようにする。

（エ）互いの表現の良さや工夫について鑑賞する場の設定

線の動き、色の濃淡、混色、形の配置の仕方など一人一人の工夫を取り上げ、共有する鑑賞の時間をもつ。また、友達と対話をしながらつくる時間も大切にする。そうすることで、自己の考えを広げ、より自分のイメージや思いに合わせた作品につくりかえることができるようにする。最後は、出来上がった自分の作品を名刺代わりに持ち歩き、オノマトペを発しながら学級の仲間と自由にコミュニケーションをとる時間をもつ。同じ冬の音を表した絵でも表し方が違う面白さや、それぞれの表し方の良さを見つける豊かな授業の終末にする。

（3）本題材の目標（図画工作科）

冬のオノマトペを自分なりのイメージに合わせてつくる活動を通して、互いの形や色の組み合わせの良さを感じながら、自分の思いに合わせて工夫して表す。

（4）評価規準

・冬の世界と結びつけながら自分の感覚や行為を通して形や色の感じを理解するとともに、冬のオノマトペに対する自分の思いを基にして、適切に材料や用具を使い、形や色、配置などについて工夫して表すことができる。【知識・技能の習得】

・自分の表したい冬のオノマトペのイメージをもち、それに合った形や色の組み合わせを考えることができる。【思考力・判断力・表現力の育成】

・形や色について感じ合うイメージを通して、互いの発想や表し方について共有する中で、さらに思いをふくらますことができる。【学びに向かう力・人間性の涵養】

3　実際の授業

（1）冬の音探し（1時間）

寒くて体が震える冬の日。活動の始めは子供たちの表情はかたく動きも鈍かった。

しかし、中庭で氷や霜を見つけると一気に表情が明るくなり声をかけあって子供たちは活動の範囲を広げていった。ここからは、3名の児童を中心に子供たちが身近な自然物や環境と関わる様子や表現活動に着目していく。

Aは、氷をじっくり眺めて手で触ったり足で踏んだりしていたが、途中から鉛筆を使って氷に文字を書くという行為に夢中になっていた。手から伝わる氷の滑り心地や氷に残る筆跡の感じを楽しみながら「カクカク」というオノマトペを言って何度も繰り返し鉛筆を滑らせていた（図2・次ページ）。Aの行為に気づいた周りの友達が「ナイスアイデア！」と言って真似し始めるとAはうれしそうな表情を浮かべて自分の名前を氷の上に書いていた。Bは氷を踏んで割れ目ができる様子に見入り、その時の音を慎重に聴いていた。視覚、聴覚、触覚を働かせて「パリッザックンバキザックン」という響きが豊かなオノマトペを生み出していた。Cは砂場の砂の中に手を入れていた。手から全身に凍りつくような冷たさが伝わったようで「ピギーン」というオノマトペを発してその行為を繰り返し楽しんでいた。この他にも岩石に顔を当てたり、凍った池の中に石を投げたり、花びらを舐めたりするなど子供たちは主体的に周りの自然物や環境に関わって五感を働かせながら様々なオノマトペを生み出していた（図3・次ページ）。

（2）冬のオノマトペを形・色で表す（図画工作科・2時間）

導入では、前時の冬の音探しをする中でオノマトペをつくりだした活動を想起させた。抽出児童の表現過程の行為や表し方に目を向けたい。

Aの場合

Aは、「カクカク」というオノマトペを直線的な線で表すことから始めていた。鉛筆の先が氷の上で滑ってうまくコントロールができなかった感じを再現しているような筆の動きだった。また、氷の透明感を色の濃淡で出

図２　氷の上に鉛筆で書くＡの様子

図３　石に顔を当てて音を聴く様子

そうとして水の量を何回も調節している様子が見て取れた。次に、水をポトンと落として滲ませていたのでその行為の理由を尋ねてみると、「氷の上に書いていたら氷がだんだん溶けて水が出てきたことが面白かった」と思いを聞かせてくれた。もう完成かと思ってしばらく目を離していたがＡはまだ何かが足りないという感じで画面を数分見つめていた。声をかけようか迷ったがその様子を注意深く見守っていると、緑色の画用紙を細く切って輪をつくりそれを立たせて接着した（図４）。そして、満面の笑みを浮かべて出来上がった作品を見せに来た。Ａは感想に「氷に鉛筆で書いた音の形を飛び出させたところを一番工夫しました」と書いていた。氷の上で書いたことが不思議で楽しかったというＡの思い、その思いを基に表し方について考え、豊かに発想や構想を広げていったことが、形を飛び出させる表現に至るまでの製作のプロセスや作品から伝わってきた。

Ｂの場合

Ｂは「パリッザックンバキザックン」というオノマトペを強弱をつけて何度も声に出して灰色の画用紙を見つめながら考えていた。そして、トレーの上で青色と緑色の絵の具を出して水の分量に気遣いながら混色することに時間をかけていた。画面全体に薄くて美しい青緑色を敷いた後のＢの行為に驚かされた。氷に割れ目が入るように激しくローラーで黒くて太い線を付け大胆に紙を破り始めたのである。これまでの絵画製作においてＢは細部までていねいに描き込み、慎重に製作を進めていくタイプであった。そんなＢが大きな体の動きで思い切り描いたり、画用紙を破いたり、手で直接描いたりして自分なりの表し方を見つけていく過程は創造性にあふれていた（図５）。Ｂは授業後の感想に「色や線を大胆に激しくすると、オノマトペが生きているみたいでとってもうまく表せて面白かった」と書いていた。試行錯誤する中で音のイメージに合う自分なりの表し方を発見した喜びが伺えた。

Ｃの場合

Ｃは、自分の描きたいテーマがなかなか思いつかずに絵を描き始めるまでに時間がかかって作品が時間内に仕上がらないことがこれまでの時間では多かった。しかし、今回は始めから「『ピギーン』を描くぞ」と張り切ってすぐに茶色の画用紙を選んでその上に刷毛で思い切り水色の絵の具を伸ばしていた。砂場の冷たい砂の感じを画面全体に表そうとしていたのだろう。次にＣの様子を見た時、図工室の中を歩き回って何かを探している様子だった。「紙以外のものを使ってもいいですか」とＣに尋ねられたので「自由にしていいんだよ」と答えると、布に着色をしてそれをボンドで画面に貼り付けた。冷たい砂の中に手を入れたという行為をしたＣしか思いつかない冬の音探しの体験を基にした表現である（図６）。Ｃの「砂の中に手を入れてみると冷

図４　Ａの製作する様子と作品

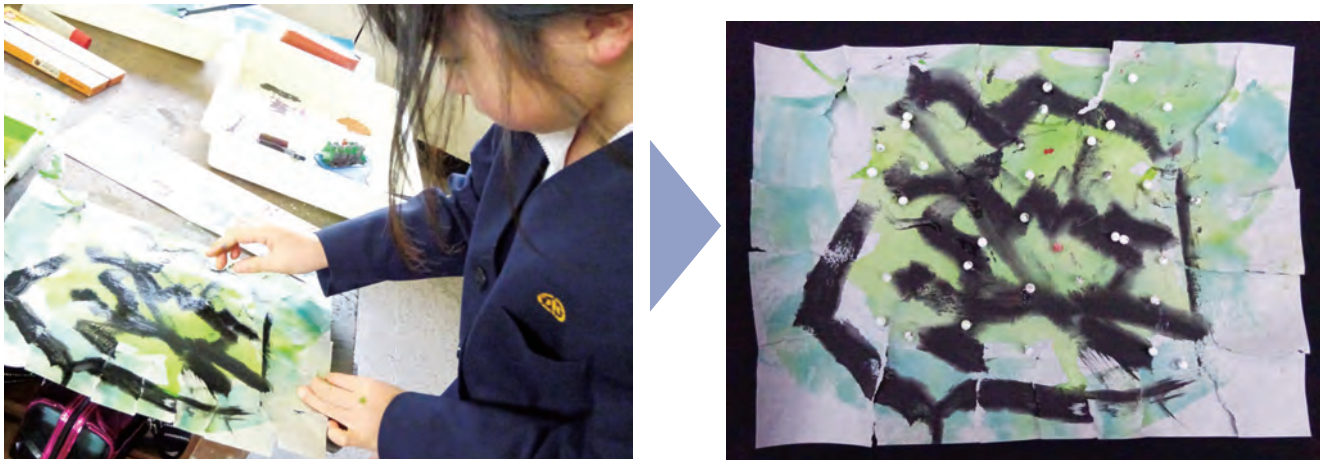


図５　Ｂの製作する様子と作品

図６　砂の中に手を入れるＣの様子と作品

たいんじゃなくてものすごく冷たくてピギーンという感じでした。だから、青と白とちょっとの茶色をぬりました。砂の冷たいざらざらを出したくて布を使いました」という感想からもCが思いに合わせて表し方を工夫していることが読み取れる。

＊　＊　＊

この3人の児童の他にも、学級全体としてこれまでの作品で表出していない新しい表現方法が数多く本授業で生み出された。

例えば、指で絵の具を弾きながら着色をする児童、こてで絵の具を伸ばしたり置いたりして描く児童など材料や用具を用いて自分なりの表し方を追求し、工夫して表す子供たちの姿を見ることができた（図7）。

冬の国からやって来たオノマトペ星人になりきり作品を名刺代わりに見せ合う鑑賞会では意欲的に他者と交流する姿が非常に印象的であった（図8）。自分の作品の基となったオノマトペしか話せない設定で活動を行ったが、作品の部分を手で押さえながら焦点を示し、言葉に抑揚や強弱をつけて作品を紹介し合う様子が見て取れた。最後に「面白い星人や自分と似ている星人はいましたか」と全体に問いかけることで表し方の工夫や良さを共有することができた。

（3）冬の絵を楽器を使って音楽で表す（音楽科）

導入では、学級全員の冬の絵を教室一面に並べて「どんな冬の音が聴こえてきますか」と問いかけて絵を鑑賞する時間をもった。子供たちは口々にオノマトペを声に出していたが、同時に冬の音探しの様子も思い出していた。そして、お気に入りの絵を1枚手に取り、その絵のイメージに合った楽器を自由に選ばせて4人グループで音楽づくりの活動を行った。子供たちの会話に耳を傾けると、「葉っぱを触ってザラザラした感じだからカバサを使おう」「形が激しい感じだからここは全員で太鼓を叩いたらいい」など絵の形や色、質感などから表したいイメージを広げ、楽器で表現する強弱やリズムを考えていた。4枚の絵をつないでグループで音楽づくりを行った後に、冬の音楽ミニコンサートと題して発表会を行った（図9）。簡単なリズムづくりはこれまでに経験していたが子供たちにとって音楽づくりの活動は初めてである。授業の感想では「自由に新しい音楽をつくるのが楽しかった」という感想が多く、事後アンケートでは全員の児童が音楽づくりの活動が好きであると答えた。

（4）冬の絵を体の動きで表す（体育科）

体育科の授業を行う前に、既に子供たちから「絵で冬ダンスも作りたい」「絵から踊りもできそう」という声が多数挙がっていた。子供たちは手本の動きを真似する表現運動の経験はあるが、自分たちで創作する経験はなかったためにこのような意欲を聞くことができたのは本題材の諸活動を通して体や心が開いてきている表れだと感じた。体の動きを考える時の話し合いでは、「優しい色だったら体の力を抜いてみよう」「形がいろいろなと

図8　オノマトペ星人になって鑑賞する

図7　自分なりの方法で表す様子

ころにあったら動き回るといい」などの意見が挙がっていたが、絵の形や色の特徴からそれぞれの児童がイメージを広げていることが動きからも伝わってきた。また、初めての創作だったが、どの児童も冬の絵を基にして即興的・直感的に体を動かして活動を楽しんでいた（図10）。

4　研究の成果と課題

（1）本題材（図画工作科）における手立てに対しての成果・課題

（ア）身近な自然物や環境に体全体で働きかける場の設定

活動後の感想では「目、鼻、口、手を使うとたくさんの冬の音が見つかった」「自分たちだけの冬の音がつくれてうれしかった」などの記述が多かった。子供たちとの活動を通してそんなふうに自然と関わる方法もあったのかと感心させられ教師の方が冬の楽しみ方を教えてもらったように思う。生活の中の形や色、音と関わる子供の行為や活動の様子を共感的な見方で共有することが、その後表出する一人一人の表現を深いレベルで理解し、子供の心に寄り添うことにつながった。

図９　音楽科の授業の様子

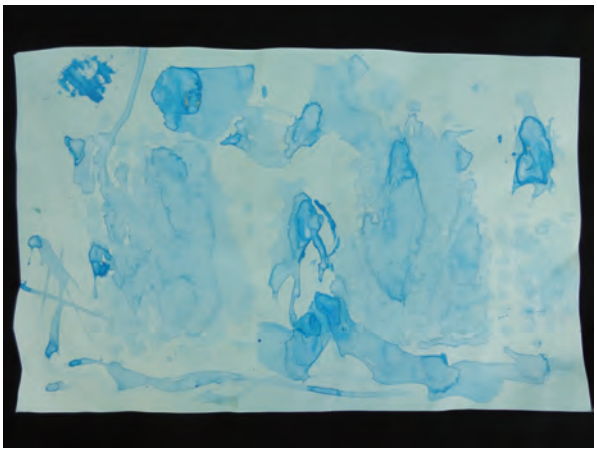
（イ）自分が見つけた冬の音をオノマトペで表す活動

オノマトペで冬を記録するという方法は有効だったと感じる。例えば、氷を踏むという同じ行為をしても子供たちは「ジャリジャリ」「パキッ」など違ったオノマトペをつくりだしていて、体を通して感じた一人一人の独自の世界が存在することが読み取れたからだ。学級全体で計60種類のオノマトペができあがったが、その数だけの「冬のオノマトペカード」を作成し、互いがつくりだした言葉の面白さを共有させた。達成感を味わわせるためには効果的であったが、60あるオノマトペの内どれを絵に表しても良いと設定したのは反省点である。自分の体験から湧き出る表したい気持ちを途切れさせ、混乱を招いてしまったためである。結果的に子供たちは自分がつくったいくつかのオノマトペをそれぞれ

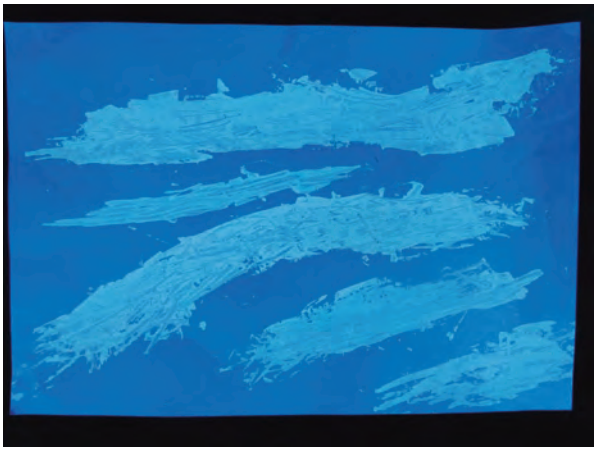
図 10　体育科の授業の様子

図 11　児童たちの作品

「ポカサッサー」
刷毛を使って描く



「キーン」
水を垂らして描く



「ヒュー」
こてを使って描く

「シャリシャリ」
紙にしわを付けてローラーで描く

「サクッコーン」
紙の形を切って変える

「シィィィーンキーン」
トレーの中で混色した色を写しとる

絵に表していたことからも製作前の設定は改善の必要があると感じた。

(ウ) 自分の表したいことを試すことができる環境づくり

材料や用具を豊富に用意していたことは子供たちの豊かな表現を生み出すことにつながった（図11）。自分の表したいことに基づいて材料や用具を選択し、試行錯誤しながら自分なりの表し方を見つけていく姿があった。特に大きなトレーは子供たちの造形的な視点や表現の幅を広げるのに役立った。トレーの中で色が混ざる不思議な様子を眺めたり、実験のように水の分量を調節したりするなど感覚や行為を通して知識・技能を身につけていく過程が見て取れたからだ。教師が用意していた以外にもCのように図工室にある材料から選び取って表現に生かしていた児童もいたため、普段から自由に使える魅力的な材料を準備しておくことが造形的な見方や考え方を育てるためにも大切であると感じた。

(エ) 互いの表現の良さや工夫について鑑賞する場の設定

活動の途中で全体的に互いの表現を見合うミニ鑑賞の時間をとったことが果たして良かったのか課題として残る。なぜなら、ミニ鑑賞後にすぐさま友達が使っている目新しい道具に飛びついたり、教師が褒めた児童の真似をしたりする児童が目立ったためだ。それまで真剣に自分の作品に向き合い試行錯誤していた子供の思考を寸断し、安易につくりかえる行為を招く結果になってしまった。子供たちは自然な対話の中で冬の音探しの活動をいっしょに思い出し、互いの発想や表し方の工夫を共有していた。「今、子供は何を考えているか」という鋭くあたたかい眼差しを個人にも集団全体にも向け、見守るのか、支援するのか、どんな声かけをするのか改めて毎時間の授業の中で考えていきたい。

(2) 評価規準に対しての成果・課題

3人の抽出児童に対して、「自分の感覚や行為を通して」知識を身につけるという学びの過程に着目すると、冬の音探しの体験が図画工作科の製作でも呼び起こされ、Aの「水を垂らす」Bの「紙を破る」などの行為として知識に表れていた。Cは、色の冷たい感じを混色したり、砂のざらざらした質感を布を用いたりすることで理解していた。そのような実感を伴った理解と共に、お互いの作品を鑑賞し、音楽や体の動きで表すことでさらに豊富で質の高い知識を身につけることができた。冬に対して寒いというイメージしかもっていなかった児童が多かったが、「冬の音はいろいろな形や色、動きとなって人を楽しませることができる」というような多面的な見方や考え方が育まれ、学びを深めていたことに成果を見出すことができた。

(3) 教科横断的な学習の成果・課題

小学校の音楽科において「音楽づくり」の実施の割合が低いことが以前から課題として挙げられている。また、体育科の「表現運動」も実践上の困難が指摘されている。このような子供の想像力や創造性を大切にする活動に対して教師が苦手意識を抱いて敬遠していることが大きな課題であると感じ、美術教育発信の創造的な学びの提案になればという思いも込めて本研究の題材を実践した。今回、冬という共通テーマを基に各教科における表現活動を相互に関連づけたことは、子供たちの心や体の感覚を開かせて表現方法を拡張することや想像力を育むことができたという点で一定の成果があった。本題材の実施前後で冬の楽しさを尋ねるアンケートをとった。実施前はクリスマスや正月などの行事が圧倒的な数を占めていた結果から、実施後は冬の自然物や自分がそれらに働きかける行為に対する記述が大幅に増えた（図12）。また、子供たちの感想からは、表現することが生活を楽しく豊かにするという気づきや学びが読み取れた（図13）。冬の音探しを礎に本題材の活動をスタートさせ、表現に対する思いや考え・イメージを深めていく力、その根底に働く感性を育成することができたことが最も大きな成果であると言える。子供の中に本来備わっている生活の中の形や色、音などと豊かに関わる力を一層伸ばすという観点に立ち、題材や授業づくりを行うことが大切であることを感じた。絵を媒体にした音楽づくりや身体表現では、即興的に自由に表す楽しさを子供たちは感じていた。創作への抵抗感を軽減し、表現意欲を高めたり発想を得たりするのに絵は効果的に働いたと言える。しかし、今回の実践では、自分の思いや意図をどのように音の

要素や体の動きに結びつけたかを全体で共有し、その表現の良さや面白さを価値づけていく学習過程が不十分であった。ねらいとする資質や能力を子供たちが十分に発揮することができるように、図画工作科と関連付けた教科の授業構成や学習過程について再度検討していくことが今後の課題である。

新学習指導要領においても、教科等横断的な視点でカリキュラムマネジメントを充実させていく必要性が示されている。[3] 一人一人の子供たちの想像力や創造性がこれからの文化や生活、社会をつくりだすことにつながっていくという明るい希望の視点をもち、学校全体として教育課程に基づく教育活動の質を向上させるために本研究の学びを生かしたい。

【脚注】

1 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 図画工作編』東洋館出版社 2018 p.9
文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 音楽編』東洋館出版社 2018 p.9

2 佐々有生編著『図画工作・美術科教育の理論と実践』現代教育社 2001 p.138

3 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編』東洋館出版社 2018 pp.4-5

【参考文献】

初田隆「総合的な芸術教育プログラムの開発」『美術教育学』第31号 2010

田村学編著『カリキュラム・マネジメント入門』東洋館出版社 2018

国立教育政策研究所編『資質・能力 理論編』東洋館出版社 2016

題材実施前

・お正月　・クリスマス　・雪　・冬休み
・スケート　・旅行　・雪だるまづくり
・お年玉　・テレビ　・みかん　・なべ
・雪合戦　・スキー　・とんど　・もちつき
・こたつに入ってゴロゴロする
・クリスマスプレゼント

題材実施後

・雪遊び　・オノマトペづくり　・音
・つらら遊び　・運動してあたたくなる
・おどり　・風が強い　・氷とり　・氷を割る
・夏には見れない景色　・雪だるまづくり
・氷ができる　・霜をふむ　・自然観察

図 12 「冬の楽しさ」を尋ねるアンケート結果

ふだんは聞かないオノマトペ。ふだんずっと聞いているオノマトペ。人それぞれ、オノマトペの表し方はちがう。考え方もちがう。オノマトペは人の心をふきこむとただの音じゃなくみんなを笑顔にできる音になる。
人それぞれの音、動き、形の表し方がおもしろい。心のふきこみ方でいろいろなものになることを学んだ。

冬のことがもっともっと知りたくなりました。
例えば通学路でオノマトペがいっぱい見つかるかも！
四つの季節は年に１回しかないから楽しんで自然のことをもっと知りたいです。

一つしたことは全部の他の教科にも役立つから他の授業と合わせて考えると考えやすいです。例えば、国語で「ありの行列」を学んでいるけど例えばありの様子でも音で動きで形や色で表現できるんじゃないかと思います。音、動き、形、色は特別なすごい力をもっていることを学びました。だから春、夏、秋も表現したいと思いました。

図 13 子供たちの感想より